北九州市立則松中学校

【学校ホームページアドレス】
www.kita9.ed.jp/norimatsu-j

ジャガイモ

校長通信　No.２９４

令和６年　２月１３日

「 百人の一歩④～女川いのちの石碑から学ぶ～ 」

校長　江　口　　満

【上】2014年8月撮影した女川中学校の玄関前広場の「女川いのちの石碑」。震災からおよそ10年を経た2021年11月に２１基の設置を完了したと聞く。【下】1月9日(火)三学期始業式でお話しした「釜石の軌跡」の内容もしっかり記憶に刻まなければならない。

【前号からの続き】2014年(平成26年)8月、私は宮城県女川町立女川中学校を訪問した。震災資料館を見学後、A校長から一冊の本を託された。そして玄関前にある「女川いのちの石碑」に案内された。2013年、女川中学校生徒会は、町内のすべての浜に、津波が到達した地点より高い所に石碑を作ろうと動き出したと聞く。これが、「いのちの石碑プロジェクト」だ。この石碑にはこう綴られていた。

2011.3.11　ここは、東日本大震災津波到達点より高い
女川いのちの石碑　千年後の命を守るために
夢だけは壊せなかった大震災

東日本大震災で多くの人々の尊い命が失われました。地震後に起きた大津波によって、ふるさとは飲み込まれ、かけがえのないたくさんの宝物が奪われました。
「これから生まれてくる人たちに、あの悲しみ、あの苦しみを、再びあわせたくない！！」その願いで、「千年後の命を守る」ための対策案として、①非常時に助け合うため普段からの絆を強くする。②高台にまちを作り、避難路を整備する。③震災の記録を後世に残す。を合言葉に、私たちはこの石碑を建てました。
ここは、津波が到達した地点なので、絶対に移動させないでください。もし、大きな地震が来たら、この石碑よりも上へ逃げてください。逃げない人がいても、無理矢理にでも連れ出してください。
家に戻ろうとしている人がいれば、絶対に引き止めてください。
今、女川町は、どうなっていますか？
悲しみで涙を流す人が少しでも減り、笑顔あふれる町になっていることを祈り、そして信じています。

2014年3月　女川中卒業生一同

2011年3月11日東日本大震災

「釜石の奇跡」

釜石東中学校生徒のとった行動から学ぶ避難三原則

原則１：想定にとらわれるな

ハザードマップに示された通りに津波が来るとは限らない。実際、東日本大震災では想定外の津波がやってきました。与えられた想定にとらわれることなく避難行動を起こそう！

原則２：その状況で最善を尽くせ

ここまでくればもう大丈夫と考えるのではなく、その時出来る最善の行動をとろう！

原則３：率先避難者たれ

人はいざというときになかなか「逃げる」という決断ができません。津波の場合、躊躇していたらあっという間に津波の犠牲になってしまいます。自分たちが「率先避難者」になることで、周囲もそれに同調して避難することになります。中学生が率先避難者として避難を開始したことで、周りの大人たちも救ったのです。

東日本大震災、あの日を境に、私たちは、確かに変わった。誰一人として、自分のことだけを考えて、生きてはいけなくなった。そして、私たちは知った。「あたりまえのことなんてないんだ。あたりまえと普段思っていることこそが、実は、何よりも貴重で、感謝すべきことなんだ」と。

私たちはこの５年間、生徒会復興支援活動「きずなプロジェクト」を通して、被災地の様々なメッセージを繋ぐことができた。それは生徒会の先輩方が、「被災地を視察し被災された方々の声を学校に届けたい。」「被災地の特産品バザーを開催して、義援金を直接被災地に届けたい。」と決意し実行したからだ。私たち生徒会が、あの時、確かに、動いたからだ。

「動けば、変わる。」私たち生徒会が、あの時動いたからこそ、変わったんだ。一人の百歩ではない。百人の一歩で、世界は動く。挫けず、逆境に立ち向かっている被災地の人々の今を、私たちは決して忘れてはならない。そして繋いできた絆を大切に、次年度に向け、新たな支援の第一歩を踏み出さなければなるまい。そして…。私たちは、その時、必ず、動く。

【上】10月7日(土)15時30分朝倉市高木コミュニティーセンターから秀幸農園へ移動。そこには復旧が進み、稲刈りを終えた田んぼが広がっていた。梨園のＴさんからお話を伺う。「好きなことを仕事にしないと続かない。決してお金のためだけではない。利益がなくてもできる仕事。そこが農業の魅力だ。毎回安定した収入はないが、家族と協力してがんばれば、必ず何とかなる。」

「沢山の笑顔」　３年２組　生徒会生活委員長　Ｎさん

私にとって初めての被災地訪問。被災地へ訪問すると聞いても、被災地の様子が全く想像がつかず、正直何をするのかもあまり分からなかった。しかし実際に現地に行ってみると、その地域の方々の大変さが一瞬にして伝わってきた。今にも倒れそうな木や電柱、くずれそうな崖、穴の開いた道路、様々な様子が目に留まった。私はその光景を見て、この状況を少しでも変えるために今日来たんだなと初めて感じた。

その後も被災地の方々の話を聞いたり、被災現場を視察したりした。今まで見たことのない環境での暮らしがとても大変だろうと思ったが、今回の「きずなプロジェクト」で訪れた被災地の方々は、みんな笑顔を見せてくださった。きっとその笑顔が地域の人々を支えているんだろうとなと強く思った。この笑顔を守りぬくためにも、今の私たちにできることを全力で行い、完全復興を目指し頑張っていきたい。こんな貴重な一日をありがとうございました。

【上】「高木地区を笑い声の聞こえる土地にしたい。人とのつながりで農業が伸び、伝統を守りつつ新しい農業経営に挑戦したい。」と今後の抱負を述べられるＴさんお礼を申しあげ、私たちは帰路についた。

10月7日（土）18時30分学校に到着。同行いただいたPTA役員の皆さんから挨拶をいただいた。生徒会からお礼を述べ、文化祭のプレゼンに向け、また今後の支援活動の在り方について決意を新たにした。

「地域の努力」
２年１組　生徒会生活副委員長　Ｍさん

私は今年５回目となる「きずなプロジェクト」で、被災地の一つである朝倉市高木コミュニティーセンターを訪れました。先生方の話によると、平成29年九州北部豪雨で被災した当初、畑は流木や土砂で荒れ果てていて、高木地区にたどり着ける道も一つで車が通って大丈夫かと心配するほどだったそうです。しかし今年私たちが来た時には道路が整備され、畑も一面作物が育ち、先生方がおっしゃっていた風景とはかけ離れていました。

どういうことか聞いてみると、地域の方々はもちろんコミュニティーセンターの方々や多くの人たちの支援のおかげで、春ごろに復旧が終わったそうです。しかし今年の大雨で被害にまた遭ってしまったそうです。今年の被害にも負けず高木地区で作られた梨は、とっても甘くておいしくて、大切に育てられているのが伝わってきました。私もこれからどうやったら被災地のためになるのかを考えていきたいです。

【左】バザー当日のＰＴＡの皆さん【右】バザー前日、仕分け作業の様子

「素晴らしいプロジェクト」２年１組
生徒会体育副委員長　Ｓさん

僕は先日、生徒会として被災地に訪問して様々なことを学ぶことができた。特に印象に残っているのは、福岡県朝倉市高木コミュニティーセンターと秀幸農園の方のお話だ。コミュニティーセンターの方の話によると、被災する前と人口を比べると、三分の一程度に減ったという。また平均年齢も70歳近くになったため、復旧しようと思っても体が気持ちに追いつかない状況だという。被災された方々は、どんなに復旧したくても出来ないこともあるという気持ちで生活をしているのかと思った。

また梨園の方は、「しょうがないと思って笑って生きるしかない」と言っていた。僕はこの言葉を聞いて、僕たちはますます被災地を助ける活動を続けなければいけないと思った。僕はきずなプロジェクトを通して、たくさんの大切なことを学ぶことができた。

「復興への道しるべ」
２年４組　生徒会保健副委員長　Ｏさん

私は今回初めてきずなプロジェクトに参加しました。私自身被災した経験がないため、少しでも被災地の現状を知ることと、被災された方々が元気になってもらいたいという思いに賛同して参加しました。実際参加してお話を聞くと、高齢者が多い地域では復旧作業にとても時間がかかったそうです。しかし、多くのボランティアの方々が来てくれたおかげで復旧が進んだということを話してくれました。このように人と人が支え合い助け合うことで、私たちが生きていけるということを学びました。これから私自身も困っている人へ手を差し伸べ、共生できる街づくりを目指したいと思います。最後にこの学びを多くの方へ伝え、復興への道しるべになればと思います。

【上・左】10月18日（水）被災地特産品バザー当日の様子。被災地生徒派遣費も含めてＰＴＡの皆さんには全面的にご支援、ご協力いただきました。